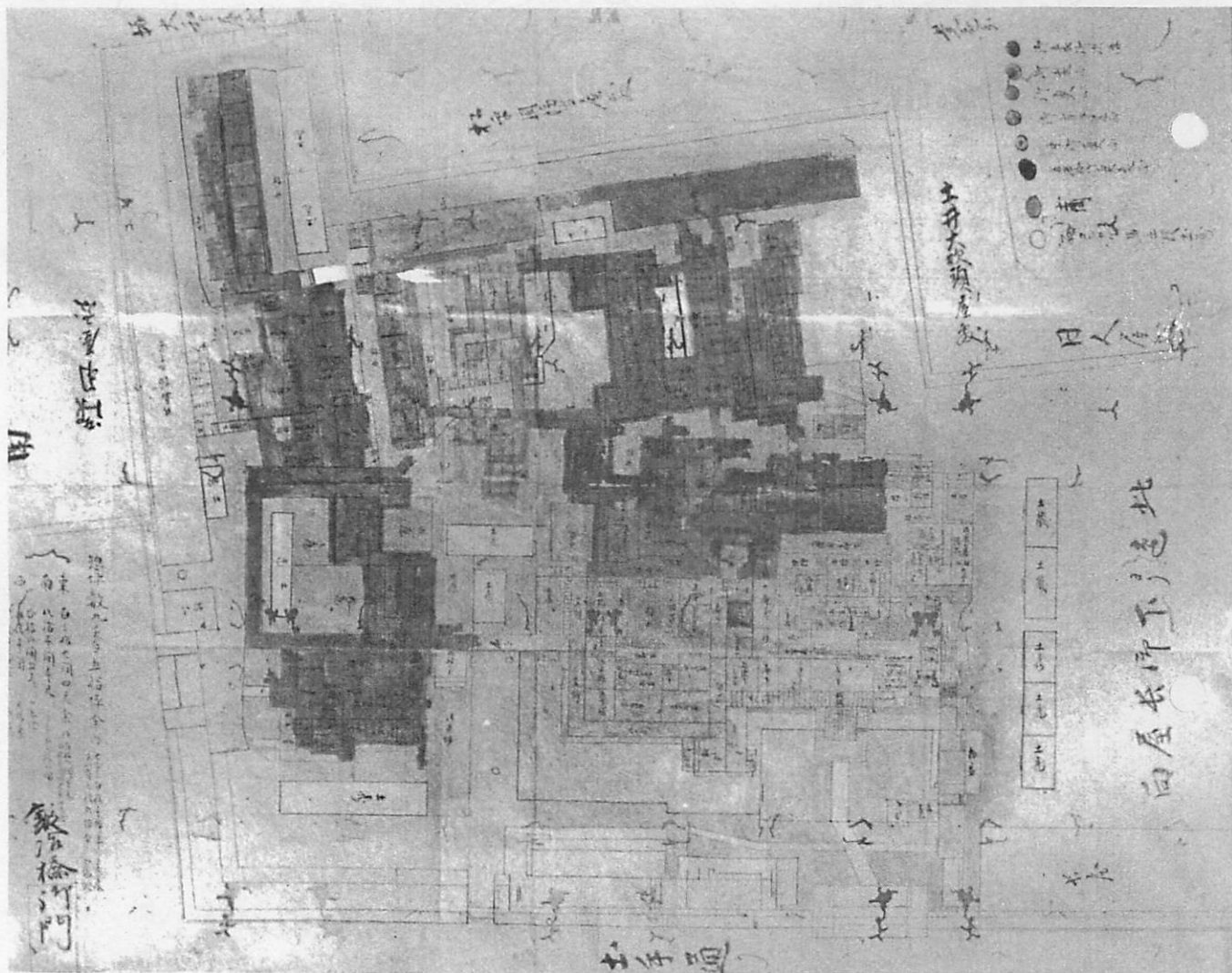


第4号

昭和60年10月31日

郷土館案内

津山市南新座26 市立津山郷土館 TEL(08682)2-4567



松平家江戸藩邸図（鍛冶橋邸）

(五五×七三竪)

江戸時代後期、松平家の江戸藩邸は鍛冶橋門内・浜町大川端・高田にあり、鍛冶橋邸が上屋敷であった。

この絵図は、江戸時代後期の鍛冶橋邸図である。藩邸は、数度の建替・増改築がおこなわれているが、主に出火・類焼によるものである。

総坪数九一五〇坪余の広大な敷地に、公・私の部屋が整然と記されている。鍛冶橋門を入り東の土手通に面して正門があり、門を入ると公的な「御表向」の部屋が並び、これに続いて「御表門次向」の間、その奥（西側）に表向と仕切りとなる明地を置き、藩主の私的な「御奥向」の間が設けられている。これに続いて南側に、明地と併によって一区画とした藩主夫人の「御方御住居向」の間、さらに南側には、藩主の子息とその守役等の「若殿様御奥表向」の間が東西に長く設けられている。

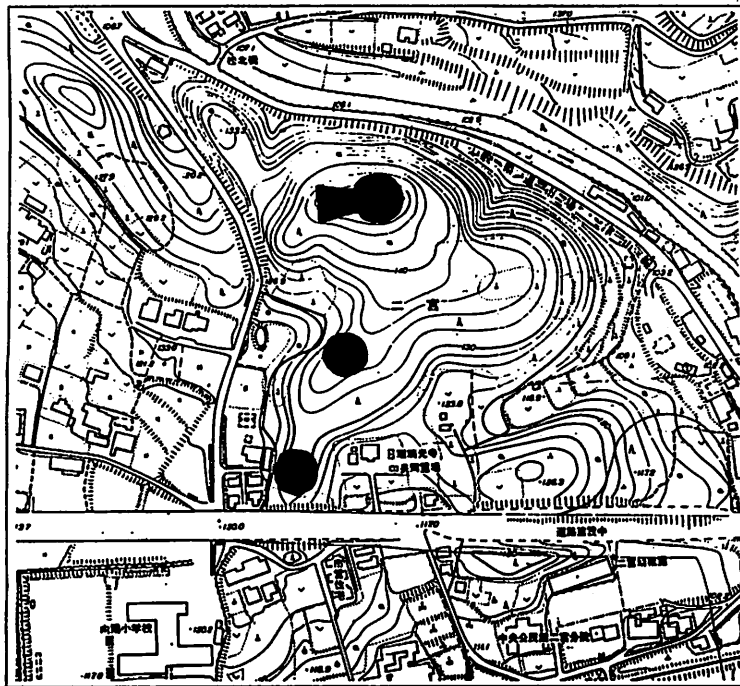
なお、この絵図では、北側に藩士居住の長屋数棟が建立しているが、略されている。

(神尾 齊)

美和山古墳と蛇塚考

美和山古墳群は美作地方最大の前方後円墳を含む計三基の古墳よりなる古墳群で、昭和五二年国指定を受けています。美作地方最大の前方後円墳でありながら、沼の弥生住居跡群などと比べ、一般的には案外その所在が知られていないようでありま

す。津山市二宮の向陽小学校正門から北へ進むと、うっそうと茂った山を通り抜け、田邑へ通ずる道と合流します。古墳群はこのちょうど中間あたりの道路の東側の丘陵に位置します。現在この古墳群は史跡公園として環



美和山古墳群位置図

境整備事業継続中であり、道路から説明板、標柱を眺めることができます。

美和山古墳群は北から順に一号墳、二号墳、三号墳と呼ばれています。一号墳は全長八メートル、後円部の径五〇メートル、同高さ九メートルを測る前方後円墳です。二号墳は径四〇メートル、高さ七メートルを測る二段築成の円墳です。三号墳は径四〇メートル、高さ五メートルを測る円墳です。

一方、古くから一号墳を胸塚、二号墳を蛇塚、三号墳を耳塚という呼称もなされています。二号墳の墳頂には「蛇塚」碑も建立されており、地元の人々には古くからの胸塚、蛇塚、耳塚と

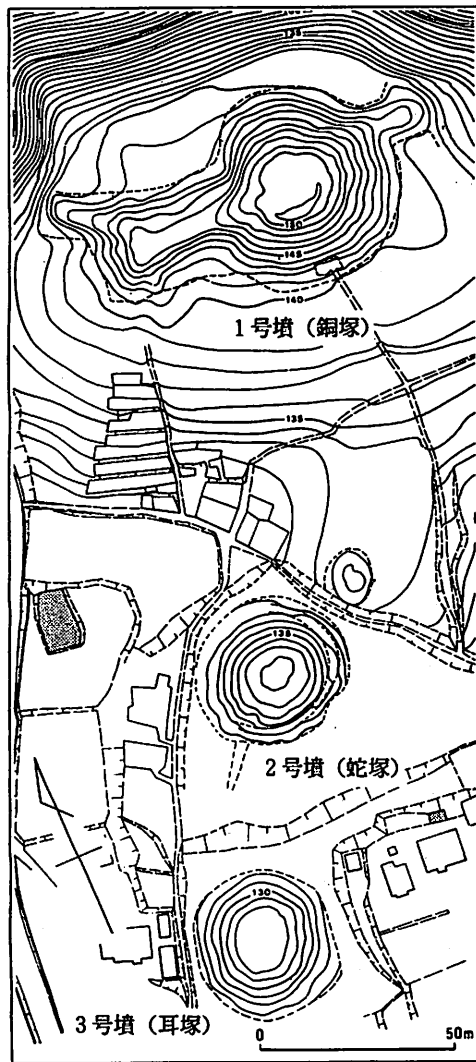
いう呼称の方が親しみやすいかも知れません。

さて、古墳といえは人間を埋葬したお墓であるのに、いかなる理由で蛇塚などという名称が用いられるようになったのでしょうか。

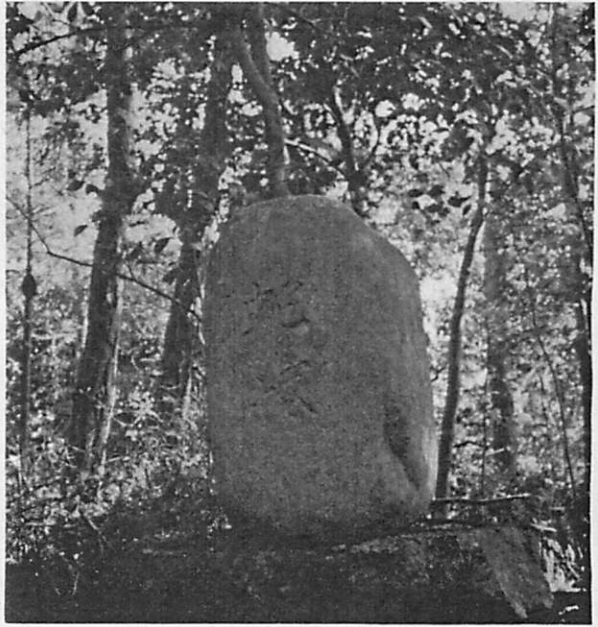
『作陽誌』元禄二年編纂の一文があります。要約すると次のとおりです。「二宮村の宇那提森の北から神楽尾山麓との間に大きな池があり、蛟龍(うろこのあるりゅう)がひそみかくれていた。蛟龍は人を襲ったり高野神社の扁額をなめたりするので、村の長老がついに蛟龍を退治し、その骨を埋めて、二つの塚を作った。一つは龍澤寺の

裏に、一つは民家の後に。二つとも蛇塚という。この二つの塚とは現在の二号墳と三号墳と考えてます間違いないものと考えられます。

『作州富川物語』さらに、『作州富川物語』にも蛇塚にまつわる記事がみられます。「戸川宿に砂田の庄司氏勝という人物が住んでいた。庄司氏勝には子供がなかった。ある日、高野神社にお参りすれば子供がさすかるといふ夢をみた。さっそく夫婦そろって高野神社に向いた。二人が神社にこもっていると、手に黄金の亀を持った人があらわれて、その亀を奥さんの胸に入れるしぐさをした。そこで目をさました。一〇ヶ月後、



美和山古墳群地形測量図



二号墳頂の「蛇塚」碑

女の子が誕生した。亀千代と命名した。大変美しい子で、七才であるのに一三・四才にみえるほどの美しさであった。

ある日、亀千代姫が女中をつけて高野神社にお参りに行った。そこで偶然、山北の鶴田勘治光行が花見に行っていて姫を見つけた。光行はそれ以来姫のことが忘れられなくなり、恋文を送った。姫も光行のことが好きになり、光行は夜な夜なかようようになる。これが父の庄司氏勝族を焼打ちにした。姫は非常に

悲しんで淵に飛び込んでしまった。それ以来この淵が亀ヶ淵といわれるようになった。しかし、氏勝は改心することなく、悪逆非道な行ないをしたため、姫は十丈もある大蛇に化け付近を通る人を食べだした。氏勝は娘の亀千代が大蛇になったとは知らないで、家来を連れて退治するために亀ヶ淵に向った。皆んなで矢を射るが、大蛇は大水を出して皆を押し流してしまつた。このため、父親の氏勝は死んでしまつたが、家来の中の宇那提兄弟が宇那提森の木にしがみつ

いているところを、大蛇が見つけ、尾っぽでなぎ倒してしまつた。これが因縁で尾なでの森ともいう。大蛇は多くの矢を射られたので、最後には死んでしまつた。村の者たちは、大蛇を焼き、灰や骨をまつたのが龍澤寺であり、大蛇をまつた塚が蛇塚といわれるようになった。」

という内容であり、「作陽誌」の内容と大同小異であります。「作州富川物語」の記された時代は不明であり、元禄二年編纂の『作陽誌』との先後関係は定かではありません。「作陽誌」の記述をもとに、物語風にアレンジしたのが『作州富川物語』ではないかとも受けとられます。この中の「塚を築いて大蛇をまつた。その塚を蛇塚という。」という内容にみられるように塚は一つしか登場してきません。この場合の塚とは二号墳か三号墳のどちらかと考えられます。「作陽誌」では二号墳と三号墳の二基が登場したのに対し、『作州富川物語』では一基の記述しかないのが大きな相違点であります。

以上のように、蛇塚は登場しましたが、胴塚、耳塚は全く登場してきません。『苦田郡誌』耳塚は昭和二年刊行の『苦田郡誌』までまたねばなりません。「宇那提森」の一節の中に記述があります。記述の内容は「作陽誌」と全く同じで、まねたものと思われま

す。ただ、最後の「蛇塚と接して耳塚があり、巨龍の耳を埋めたものである。」という一文だけが付け加えられている点が異なります。「作陽誌」に記述のなかった巨龍の耳が、ここに創作されたことがよくわかります。ここに三号墳である耳塚が初めて登場するわけです。

こうしてみると、登場してくるのは、二号墳、三号墳の蛇塚、耳塚ばかりで、今だ一号墳の胴塚は登場してきません。この二つの古墳はいずれも円墳で、一目見て塚という印象があります。巨大な前方後円墳である一号墳はこの段階頃までは、あれだけ大きいものですから存在は認められていたでありましょうが、塚として認識されていなかったのではないかと考えられるのです。というのも一号墳は戦国時代には美和山城の土塁の役割りを果していたからです。地元の人は今も「城山」と呼んでいるように、後円部に接して東側前方部に接して西側には土塁跡がはっきりと残っています。このことから、古墳の認識よりも「お城」としての認識の方が強かったのではないかと考えられるのです。

『岡山県通史』三年後の昭和五年刊行の『岡山県通史』に由来にはふれられてないが、ようやく一号墳である胴塚が登場し、三古墳が出揃うことになるわけです。ここでは明らかに前方後円形が意識されており、その計測値も記載されています。ただ、この中で耳塚の記載は「今破壊開墾されて畑となる。」となっており、事実を正確に伝えておりません。従って、この段階になってさえも、一号墳である前方後円墳と二号墳か三号墳のどちらかの円墳一基しか対象視されていないことがわかります。

以上、蛇塚、耳塚、胴塚の出自をみてきたわけですが、「蛇塚」はいわゆる蛇塚伝説に伴う二号墳、三号墳の総称であり、耳塚、胴塚という名称は蛇塚に付随する創作名称であるということがよくわかると思います。最後になりましたが、三好基之、神尾 斎両氏には多大の御教示をいただきました。文末ではありますが、記して謝意を申し上げます。次第であります。

〈寄贈資料の紹介〉

黒田家資料

故黒田英雄氏の御遺族（東京都杉並区）より、一五点余の資料を受贈致しました。旧津山松平藩十黒田家の先祖が着用されていた具足類と、昭和三年の御大典に際し、氏が大礼使参与官に任ぜられた節の資料である。

故黒田英雄氏は、明治一二年九月津山市田町に生れ、同三八年東京帝国大学を卒業、大蔵省に入り後に大蔵次官に就任、昭和七年貴族院議員に勅選されている。

氏は、御大典に際し昭和二年六月大礼準備委員、同年一二月に大礼使参与官に任命された。



次の辞令である。

大蔵次官黒田英雄
 大礼使參與官被仰付

昭和二年一月三〇日

内閣

翌三年一〇月三日、大禮使官房主任より

貴官ヲ左記大禮儀式庭上参役ニ撰定相成候條御承知相成度

記

一、即位禮當日紫宸殿ノ儀

という依命である。そして、

同年一月一日大禮使典儀部長
 公爵伊藤博邦より

来十二日神宮皇霊殿神殿竝官

國幣社ニ勅使發遣ノ儀被為行

候ニ付午前九時四十分京都皇宮色紙ノ間へ参集有之度候

追テ服装小禮服禮装通常禮服着用ノ事

という通知を得ている。

受贈資料には、この折着用した礼服や、藩政期参勤道中に使用された具足櫃など興味ある資料が含まれている。

多胡家資料

多胡信子氏（東京都世田谷区）より、陣羽織・旗差物や古文書類八〇点余を受贈致しました。多胡家は、藩政時代東北条郡綾部村（津山市綾部）に居住し、代々大庄屋を勤めていました。受贈資料の大半が古文書類で「郷中御条目」「綾部構庄屋印鑑

帳」「綾部構神社御改帳」や、旅人や行倒で死亡した折に見分し、藩に報告した書類の控、村民が死産した折に見分書・医師の診断書などがあり、大庄屋の職務の一端を知り得る史料が含まれています。



井原西鶴えがく

津山の富豪蔵合家

「久米の更山さら世帯より年月次第に長者となり、美作にかくれもなき蔵合に立ちつづきて人の知らぬ大分限者万屋という者あり」

「蔵合といえる家は、蔵の九つ持ちて高貴なれば、是又国のかざりぞかし」

井原西鶴が元禄元年正月（一六八八）に刊行した『日本永代蔵』巻五「三匁五分曙のかね」の中にえがき、蔵合をそれこそかくれもなき大富豪として、いまにまで世に知らせた記事だが太宰治も、この「日本永代蔵」をもとにして「お伽草紙」を書きあげている。

「むかし美作の国に、蔵合という名の大長者があつて、広い屋敷には立派な蔵が九つも立ち並び、蔵の中の金銀、夜な夜な呻き出して四隣の国々に隠れなく、美作の国の人たちは自分の金でも無いのに蔵合のその財産を自慢し、薄暗い居酒屋でわずかの濁酒に酔っては、蔵合さまに及ぶもないがせめて成りたや万屋に

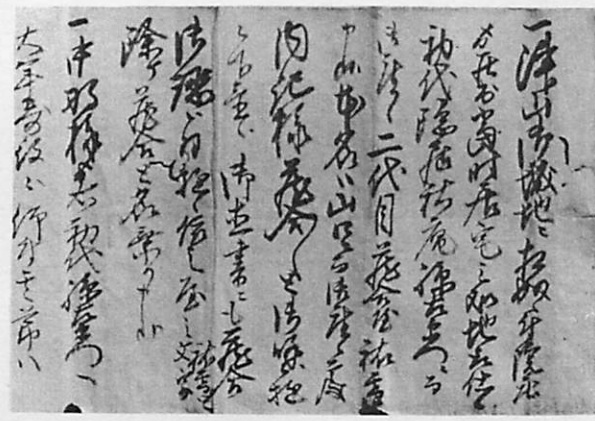
という卑屈の唄をあわれなふしで口ずさんで淋しそうに笑い合ふのである。」

太宰治は、小説の中に富豪蔵合を復活させているが、その実像は、明らかでなく、今後の課題とされている。

蔵合が津山に居を構えたのは

もちろん、津山森藩初代の森忠政が城下建設に着手したときだが、それまでの本拠は、院庄といわれている。玉置家文書（津山郷土館蔵）の中に、蔵合家由緒書ともいえる資料があり、その中に「津山が城下になったので、院庄より移った」と記されている。

現在、院庄に蔵合屋敷跡、あるいはそれを示すような伝えは消えているようだが、同地の清眼寺の過去帳に「蔵合ふる墓通



「玉置家文書」



津山市西寺町 光厳寺 蔵合家の墓地



り」などと、蔵合に関する記録があり、まず間違いなく、院庄を本拠にしていたと思われる。院庄は、中世に美作守護館も置かれ、津山に城下町が築かれるまで、美作で中心的な役割を果たした地域。ここで努力をつちかったことは、十分に考えられる。

また、津山市西寺町の光厳寺は、蔵合建立の寺といわれ、一族の蔵合節子さん（津山市田町在住）も「光厳寺には、蔵合の墓地がありますが、むかし蔵合が建立した寺と聞かされています。本堂の天井や床板の裏に、蔵合と書いてあると、父母が話していました」といいます。

作陽誌(元禄四年編)は、清眼寺の項に「山名伊豆守時代の開基と伝える。慶長年中に住職の秀照が津山に庵を設けて清眼寺といつた。延宝三年春(一六七四)に光厳寺と改称した」と記し、蔵合には触れていないが清眼寺と光厳寺のつながりを裏付ける。

光厳寺には、蔵合建立の伝えが、いまでも残る。

善台寺が、院庄時代は清眼寺であり、津山移住後は光厳寺。光厳寺には、現在も蔵合墓地が残っているが、清眼寺には、蔵合家と記すはつきりした墓石が見当たらない。同寺の墓地は、新たに整地され、以前の形が交わっているためでもあるうか。

院庄を本拠にしたという直接の資料は、いまのところ見つからないが、まず間違いはあるまい。

津山に移住後の蔵合については、玉置家文書(市郷土館蔵)に次のように記されている。

「津山が城下になったので、院庄から当地へ移った。初代は隠居秋庵孫左衛門という。二代目は蔵合祐雪。本名は山口だが内記録(森長継)は、蔵合、蔵合と呼ばれ、内記録の直書にも蔵合祐雪と書かれている。この

ため、尾の文字をとり、蔵合と名乗った。

中将様(森忠政)より、初代孫左衛門へ大年寄をおせつけられた節は、二階町を西京町といつた。御書にも、西京町といつた。御書にも、西京町孫左衛門とある。後に私方で、二階造りをしてから二階町の町名になったと、旧記が記している。

三代目は、隠居名を祐孫左衛門という。内記録から乗馬、帯刀御免になった。例年歳暮に孫左衛門は、伴ともども登城する。

右の孫左衛門の倅、隠居名を祐水という。十五歳で出府、美作守様より二十一歳の年十二月二十六日に二十人持を加増となり、都合三十人持になった」

津山初代以後、四代までと、津山の屋敷が二階町だったことがわかるほか、二階町の町名の変遷、由来が記されている。

いま一つ、やはり郷土館の松平家文書に「大年寄、札元および苗字帯刀門松御免のこと」という文書があり、その中に蔵合について、次のように記され、系譜の一部がわかる。

「蔵合孫左衛門、天保十六年六月二十六日(一八四四、弘化元年)大年寄見習、帯刀御免。

六人扶持を下しおかれる。ただし御目見えのときは本役次席。同年六月二十九日に川下の御運上取り立て役に付き、御手当を年銀五十枚を下しおかれる。

嘉永二年十二月十六日(一八四九)大年寄本役となる。教諭場懸同役同様おせ付けらる。同年十二月二十七日。先名の友五郎を改名。同日教諭場懸、万人構締方同役同様おせ付けらる。同年八月四日綿会所懸をおせ付けらる。

安政四年七月二十八日(一八五七)町方油方懸。同五年十二月二十一日御用油方をおせ付けらる。ただし慶応三年四月十一日(一八七六)近年本役が格別に御用が多く、願いの通り御免。

万延二年正月十三日(一八六一、文久元年)御勘定所御貸付取立扱方。元治元年八月九日(一八六四)宿屋懸。同年三月二十九日市中監察役勤務中は帯刀御免。同年六月二十五日病氣、願い付き役御免」

また、玉置家が所蔵する文書の中にも、蔵合家について記録があり、これもかなり詳しい。「元禄十三年五月九日(一七

〇〇)松平宣富、油屋孫右衛門笹屋九左衛門を以て御代官に請い、允許となり、これを発行(藩札)す。

蔵合孫左衛門この節家屋敷を明渡し、美野職人町持ち家大工忠治郎方へ引越し、また三町目浜野屋隠毛借受け引越していたが、御代官守屋助治良殿より最早旧宅へ帰ってもよいと申し付けられたので、孫左衛門と改め二階町の屋敷へ帰住した。

札元役 蔵合弥三右衛門正次 三代目蔵合孫左衛門正次。三代目孫左衛門、親族阿智屋弥三良直良を養子となす。元禄八年(一六九五)大年寄を願いにより御免。同十三年五月九日(一七〇〇)に札元をおせ付けらる。宝永五年正月二十五日(一七〇八)銀札発行停止に付き免ぜられる。

元禄八年(一六九五)弥三右衛門改名。同十三年三月(一七〇〇)孫左衛門と改名。宝永七年(一七二〇)大年寄

享保十五年九月(一七三〇)札元をおせ付けらる。延享四年三月(一七四七)老年になり、勤めが出来難く願

付き免ぜらる。即日太郎兵衛隠居。 四代目蔵合十兵衛守良 延享四年五月七日(一七四七)札元役。

寛延二年三月十八日(一七四九)大年寄役。即日孫左衛門と改名。 宝曆十年三月(一七六〇)願いに付き、札元を免ぜられる。」この蔵合家系に直接関連するのが、光厳寺の墓だが、これには次のように刻まれている。

「天和元年(一六一七)十一月二十三日、真性祐持禪定門靈位。蔵合太郎兵衛」 「寛永十七年(一六四〇)正月二十六日、真観妙林信女靈、自寛永十七年(一六四〇)至元禄二年(一六八九)五十回忌」 「慶安四年(一六五二)五月十二日、夏林妙桂禪定尼靈」 「承応三年(一六五四)七月七日、連翁祐説信士靈、自承応三年(一六五四)至元禄十六年(一七〇三)五十回忌」 「寛永六年(一六六六)正月七日、春?妙幻禪定?靈位」

「明治五年二月二日・蔵合孫左衛門直義・四十歳、明治十二年一月十五日・妻タカ・四十六歳・明治十三年三月二十七日・マツ・蔵合直義母・六十九歳」

このほか、明治四年の蔵合家について次のような記録(市郷土館蔵)も残っている。

当時の蔵合の家族についてだが、同居を含めて七人家族だったことがわかる。

◆八七六番屋敷居住◆父・蔵合孫三郎◆商◆蔵合富治郎・嘉永六年三月二十日生・十九歳

◆祖母・末川・文化八年十二月二十八日生・六十一歳・藩州三

か月奥岡保荒之助長女◆父隠居蔵合孫三郎・天保四年十月六日

生・三十九歳◆母・たつ・天保五年四月七日生・三十八歳・羽

出村伊丹源治郎二女◆孫三郎次男・弟・友五郎・安政三年八月

四日生・十七歳◆孫三郎長女・妹・美津・安政六年十二月十七

日生・十三歳◆同居・商・山口良吉・文化十一年十一月十六日

生・五十八歳◆父・農・備前邑久郡上阿知村柴田武八亡。

蔵合の屋敷が二階町だったことは、文書からも明らかだが、元禄十年(一六九七)の「津山家数役付惣町改帳」(市郷土館蔵)の「二階町」に「蔵合孫左衛門」表口23間、奥行17間とあり、天明期といわれる「津山城下町絵図」(二階町・福井静江さん所蔵、西寺町・服部定山さん調査)には「蔵合孫左衛門」

表口11間、奥行17間とある。

「改帳」と「絵図」からみる蔵合は、現在の二階町西側の日専連ビルの角から美作印刷、津山郵便局東入り口にかけて、表口23間(四一・四秘)で、西裏を

元魚町と接し、17間(三〇・六秘)の奥行を持つ屋敷を構えていたことがわかる。

約二六六平方秘(約三三三坪)の広さだが、元禄時には、津山城下で最大。

以上が蔵合について残る資料だが、まとめると次のようになるのではあるまいか。

◆院庄時代の蔵合については明らかでない。今後、資料の発見が待たれる。

◆本名は山口といい、屋号が蔵合屋。後に蔵合と改めた。

◆津山に移ったのは、森忠政の城下建設が始まったときと思われるが、はっきりした年月はわからない。

◆津山時代の初代は、隠居名を秋庵孫左衛門という。光厳寺で初代の墓は見当たらない。

◆初代孫左衛門は、森忠政から大年寄に任命。以後、松平藩時代も大年寄、札元を勤めた。

◆森忠政時代の二階町は、西京町といった。後に蔵合が二階屋を建てたことから二階町とい

われるようになった。

◆二代目は、蔵合祐雪。二代藩主・森長継(寛永十一年)延宝二年)の時代。このときに蔵合屋から蔵合と改名。

光厳寺にある墓の中で「承応三年(一六五四)七月七日、連翁祐説信士靈一が二代目と思われる。

◆三代は、隠居名を祐持孫左衛門。親族の阿賀屋から養子に入り、もとの名を弥三良直良。後に弥三右衛門正次、孫左衛門正次と改名。隠居後は太郎兵衛ともいう。

元禄十三年(一七〇〇)に孫左衛門と改名しているのからみて、このときに三代目を継いだと思われる。延享四年三月(一七四七)に隠居。

この三代目が、美作俳諧史の研究者・池田土城さん(苦田郡鏡野町)が「美作俳諧温古」の中に取り上げている俳人・蔵合推柳と思われる。

光厳寺に「天和元年(一六八八)十一月二十三日、真性祐持禅定門靈位、蔵合太郎兵衛」と刻まれる墓があり、祐持の名前は一致するが、年代が食い違い三代目の墓か、どうか、疑問がある。

また、一族の蔵合節子さんが

所蔵する時宗繪本山・遊行寺の遊行上人一法が、蔵合家に泊まったお札に書いた歌は、蔵合直良の名前があり、この三代目のときと思われる。

◆四代目は、延享四年(一七四七)に後を継いだ千兵衛守良といい、隠居後は祐水という。

この時代に三十人扶持になった。◆幕末、最後の大年寄になったのは、蔵合孫左衛門直義。嘉永二年十二月十八日(一八四九)に大年寄。友五郎の名を孫左衛門と改名。元治元年六月二十五日に病氣のため、願い出て大年寄役を退いている。

光厳寺にある「明治五年二月二日、蔵合孫左衛門直義、四十四歳」とあるのが、この人の墓であり、明治四年の資料には「父隠居・蔵合孫三郎・天保四年十月六日生・三十九歳」と記されている。

資料からうかがえる蔵合家だが、全容はいまのところ明らかにできない。今後、どの程度まで資料が発見されるにかかっているが、森藩初期から明治にいたるまで、藩治政と深いかわりを持っていただけに説明が待たれる。

(小谷善守)

近刊案内

「美作国津山家数役付惣町堅横関貫橋改帳」

発行部数 五〇〇部
価格 未定

